

東三河地域の観光

東三河地域の観光流動状況

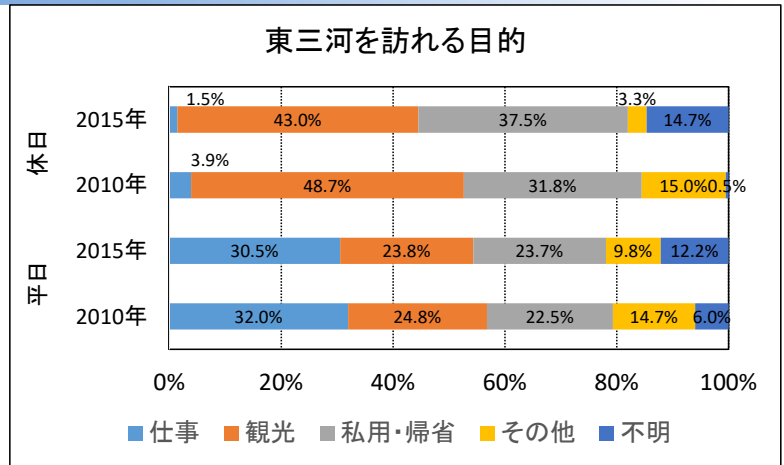
国土交通省の「全国幹線旅客純流動調査」(2015年)を利用し、東三河の観光による人流を分析した。

図表1は、東三河地域を訪れる目的の割合を示した。2015年休日では、最も割合が高いものが「観光」(43.0%)であり、次いで「私用・帰省」(37.5%)となっている。2010年と比べて、「観光」が5.7ポイント低下、「私用・帰省」が5.7ポイント上昇している。

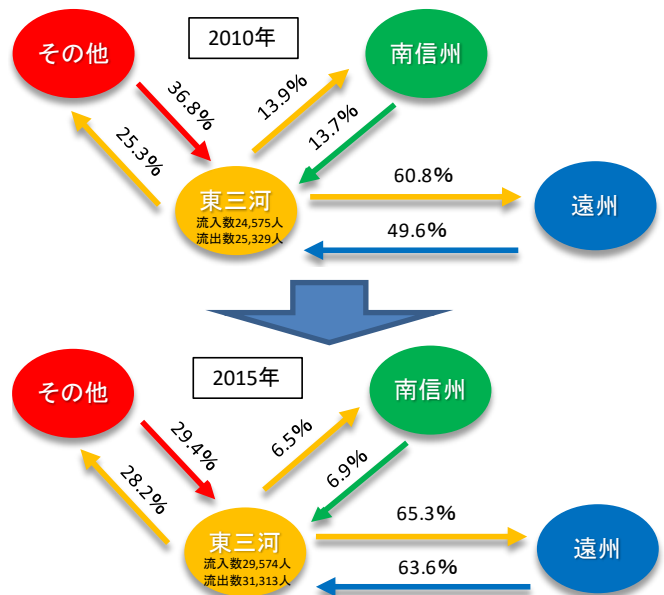
平日では、「仕事」が最も高く30.5%、次いで「観光」(23.8%)、「私用・帰省」(23.7%)となっている。2010年と比べて、「仕事」が1.5ポイント低下、「観光」が1.0ポイント低下、「私用・帰省」が1.2ポイント上昇している。

このように、休日は観光または私用・帰省を目的とした移動が大きな割合を占める一方、平日は仕事、観光、私用・帰省が同程度の割合となっており、平日と休日それぞれで移動目的は大きく異なる。

次に、2010年と2015年の東三河地域を中心とした観光目的(全機関)での休日の旅客動向を比較してみると、東三河地域から遠州地域への移動が60.8%から65.3%へ増加し、遠州地域から東三河地域への移動も49.6%から63.6%へ増加した(図表2)。東三河地域から南信州地域への移動は13.9%から6.5%へ減少し、南信州地域から東三河地域への移動は13.7%から6.9%へ減少した。東三河地域からその他地域への移動は25.3%から28.2%へ増加しているが、その他地域から東三河地域への移動は36.8%から29.4%へ減少している。東三河地域へ来訪する総移動数が24,575人から29,574人に増加し、他地域へ移動する数も25,329人から31,313人に増加している中で、東三河地域と遠州地域はつながりがより強いものとなっている。



図表1: 東三河地域を訪れる目的 (各1日あたり)
(出典: 国土交通省「第6回(2015年度)全国幹線旅客純流動調査」を利用してHRRCが作成)

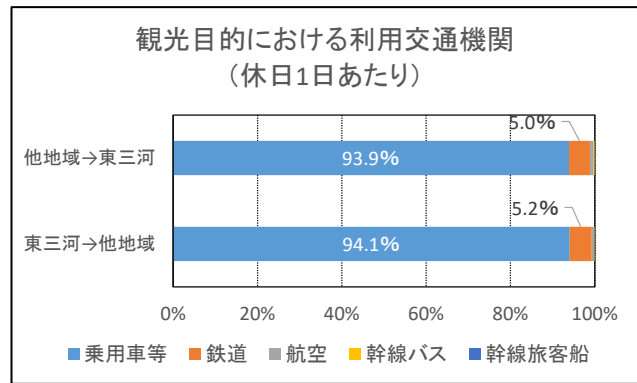


図表2: 三遠南信地域における観光を目的とした休日の流動状況
(出典: 国土交通省「第6回(2015年度)全国幹線旅客純流動調査」を利用してHRRCが作成)

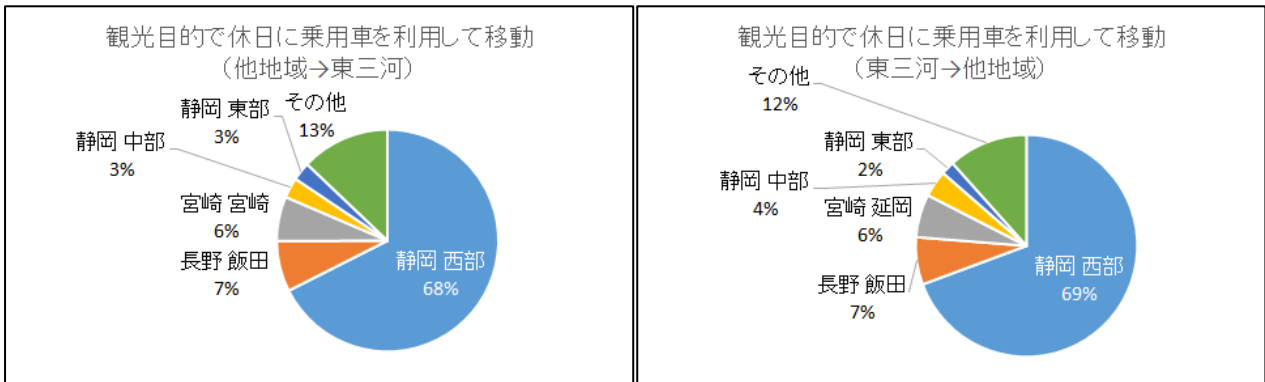
公益社団法人東三河地域研究センター

観光目的における利用交通機関をみると、他地域から東三河地域へ訪れる場合と、東三河地域から他地域へ訪れる場合と、ともに「乗用車等」が90%を超えており、次いで「鉄道」が5%内外となっている（図表3）。

観光目的で休日移動する際の利用機関別の地域別割合について、乗用車を利用して移動する場合、他地域から東三河地域へは「静岡西部」が最も高く68%、次いで「長野 飯田」(7%)、「宮崎 宮崎」(6%)となっている（図表4）。東三河地域から他地域へは「静岡 西部」が最も高く69%、次いで「長野 飯田」(7%)、「宮崎 延岡」(6%)となっている。



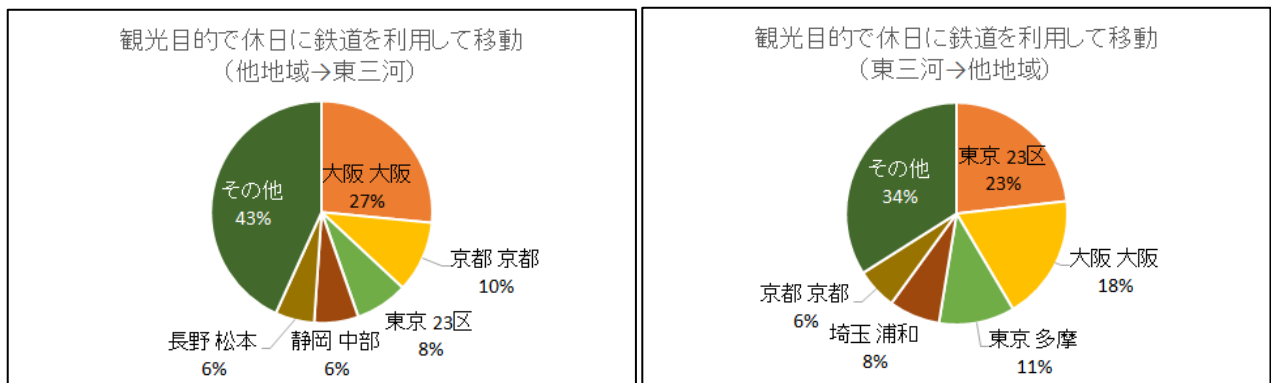
図表3：観光目的における利用交通機関（休日1日あたり）
（出典：国土交通省「第6回(2015年度)全国幹線旅客純流動調査」を利用してHRRCが作成）



図表4：観光目的で休日に乗用車等を利用して移動する地域別の内訳（他地域→東三河）（東三河→他地域）
（出典：国土交通省「第6回(2015年度)全国幹線旅客純流動調査」を利用してHRRCが作成）

鉄道を利用して移動する場合、他地域から東三河地域へは「大阪 大阪」が最も高く27%、次いで「京都 京都」(10%)、「東京 23区」(8%)となっている（図表5）。東三河地域から他地域へは「東京 23区」が最も高く23%、次いで「大阪 大阪」(18%)、「東京 多摩」(11%)となっている（図表5）。

東三河地域は、隣接する遠州地域からの流入流出の割合が高いことや、地域内の観光地の中でも渥美半島や奥三河など公共交通機関の路線網が行き届いていない地域があることから、乗用車等の割合が高くなっているものと思われる。また、三遠南信地域における観光目的での移動については、乗用車を利用した移動が主となっていると言える。



図表5：観光目的で休日に鉄道を利用して移動する地域別の内訳（他地域→東三河）（東三河→他地域）
（出典：国土交通省「第6回(2015年度)全国幹線旅客純流動調査」を利用してHRRCが作成）

東三河地域の観光特性

東三河地域は、奥三河の山や森、中心を流れる豊川、太平洋・三河湾の海など自然豊かな地域であり、またこの地域は戦国時代の古戦場としても有名で歴史的資源や伝統的な祭りが豊富にある。その他、大人から子供まで遊べるテーマパークなどもある。

(単位:人)

順位	市町村名	観光資源名	2008年	2013年	2018年	種別
1位	豊川市	豊川稲荷	3,403,000	5,000,000	5,113,350	歴史・文化
2位	蒲郡市	ラグーナテンボス	2,799,800	3,170,600	2,647,069	スポーツ・レクリエーション
3位	新城市	もっくる新城	—	—	1,190,670	その他
4位	豊橋市	豊橋総合動植物公園	733,634	693,676	847,632	歴史・文化
5位	田原市	めっくんはうす	—	613,380	750,400	その他
6位	豊橋市	豊橋まつり	570,000	330,000	670,000	行祭事・イベント
7位	蒲郡市	ガン封じ寺無量寺	501,100	—	511,440	歴史・文化
8位	蒲郡市	竹島水族館	150,613	—	508,348	歴史・文化
9位	田原市	サンテパークたはら	471,880	483,123	480,909	スポーツ・レクリエーション
10位	蒲郡市	蒲郡オレンジパーク	1,096,442	593,300	470,414	歴史・文化
11位	豊川市	砥鹿神社	403,000	—	457,850	歴史・文化
12位	新城市	愛知県民の森	553,658	525,372	444,567	スポーツ・レクリエーション
13位	田原市	伊良湖クリスタルポルト	—	652,060	416,489	その他
14位	蒲郡市	竹島園地	499,698	360,179	395,948	自然
15位	田原市	あかばねロコステーション	—	349,489	322,114	その他

図表5: 愛知県観光資源利用者数推移 (5年毎、東三河地域のみ抜粋)
(出典: 愛知県産業労働部観光コンベンション課「愛知県観光レクリエーション利用者統計」を利用して HRRC が作成)

2008年から2018年にかけて、大きく伸びている観光資源として、2018年1位の豊川稲荷(511万人)、同8位竹島水族館(51万人)が挙げられる。(図表5) また、2008年は統計がなかったものの、2018年には上位にランクインした同3位もっくる新城(120万人)と同5位めっくんはうす(75万人)の「道の駅」も利用者数の多い施設となっている。もっくる新城は2015年3月に開駅、めっくんはうすは2018年3月にリニューアルオープンしており、新装開店していることも影響している。

■アットホームな雰囲気由来場者の心をつかむ「竹島水族館」(図表6)

2018年の年間利用者数約50万人となった竹島水族館は、1990年代に約12万人にまで落ち込み廃館まで検討された施設であるが、近年、飼育員の遊び心が伝わる「魚歴史書」や、地元有数の深海生物を「日本一の展示数」と掲げたコーナーなど、ユーモアあふれる企画・展示に取り組むことで、盛況となっている。

2018年(平成30年)4月28日(土曜日) 中日新聞

「ショボい系」竹島水族館 盛況

都心の洗練された水族館とは異なり「ショボい系」とも言われる愛知県蒲郡市の竹島水族館。昨年は来場者数26万4千769人を記録した。形勢は「ショボい系」ながらも、来場者数が増えている。水族館は「魚歴史書」や「深海生物タッチ」などの企画・展示に取り組んでいる。

ローカル逆手遊び心

「魚歴史書」は、水族館の歴史や飼育員の仕事などを紹介している。また、地元有数の深海生物を「日本一の展示数」と掲げたコーナーなど、ユーモアあふれる企画・展示に取り組むことで、盛況となっている。

図表6: 2018年4月28日中日新聞より抜粋

東三河地域の観光における最近の取組み ～東三河レストランバス～

2019年2月2日～3月31日にかけて、行政・経済界で組成された東三河レストランバス実行委員会主催の「東三河レストランバス」が催行された。当該事業は、地域ブランディング推進を目的としたもので、特に田原市における「花」を活用した新たなビジネスモデルの一つとして、1階が厨房、2階が客席となっている2階建ての「レストランバス」を活用し、「花」の生産現場、加工、販売などの内容をツアーに組み込むことで、田原産の「花」を知ってもらう良い機会とし、観光資源としても有効活用がされるように実証事業を行ったものである。

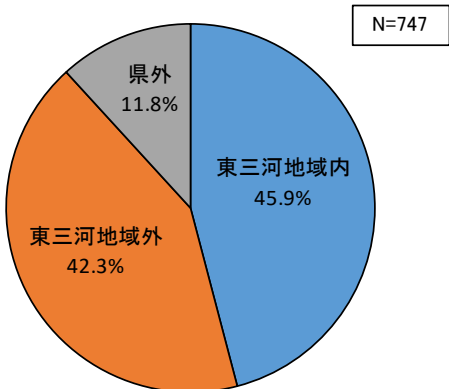
ツアー内容としては、地元食材で作られた料理を食べながら、農産物の産地や風光明媚な景色など、東三河ならではのポイントに立ち寄り、参加者に東三河の魅力を感じてもらおう企画となっている。ツアー催行本数は39本、参加者数は874人、全コースほぼ満席となった。

参加者に対し、アンケート調査を実施している（参加者数とアンケート配布数は一致しない）（図表7）。参加者の居住地について、「東三河地域内」と回答した人が最も高く45.9%、次いで愛知県内ではあるが「東三河地域外」と回答した人で42.3%、「県外」は11.8%となっている（図表8）。東三河地域や愛知県内の参加者が多数を占めた要因としては、東海地方のTV局やラジオ、新聞に取り上げられたことで、当該エリアの居住者に周知されたことが挙げられる。しかしその影響により、隣接地域である静岡県西部からの参加者は少数に留まった。

- ①対象者：ツアー参加者（※JR東海ツアーズ取扱いの参加者を除く）
- ②実施時期：2019年2月2日～3月31日のツアー催行日38日間
- ③実施方法：バス車内にて配布、回収
- ④配布数800通・回収数761通・回収率95.1%

図表7：アンケート調査の概要
（出典：東三河レストランバス実行委員会「事業報告書」より抜粋）

項目	回答数	回答率(%)
東三河地域内	343	45.9
東三河地域外	316	42.3
県外	88	11.8
合計(有効回答数)	747	100.0



図表8：参加者の居住地の内訳
（出典：東三河レストランバス実行委員会「事業報告書」より抜粋）



図表9：ツアー写真
（提供：東三河レストランバス実行委員会）